

松本清張全集 34

松本清張全集 34

文藝春秋

落丁乱丁はお取替えます

半生の記

3

ハノイで見たこと

87

エッセイより

211

解説 鶴見俊輔
509

装 幀 伊 藤 憲 治

半生の記

父の故郷

昭和三十六年の秋、文藝春秋社の講演旅行で山陰に行った。米子に泊った朝、私は早く起きて車を傭い、父の故郷に向った。これについて、以前に書いた一文がある。

——中国山脈の脊梁に近い麓まで悪路を車で二時間以上もかかった。途中、溝口などという地名を見ると、小さいときに聞いた父の話を思い出し、初めて見るような気がしなかった。

私が生山の町を初めて訪れたのは、終戦後間もなくだった。今は相当な町になっている。近くにジュラルミンの原料になる礫石が出るということで、その辺の景気が俄かによくなったということだった。

矢戸村というのは、今では日南町と名前が変わっている。

山に杉の木が多い。町の中心は戸数二十戸あまりの細長い家並だが、郵便局もあるし、養老院もある。小雨の中を私の到着を待って、二十人あまりの人が立っていた。これがみな父の母方の係累にあたる田中家の人々だった。しかし私の見たこともない親戚筋の人たちばかりだった。父の従兄の家（田中家）に寄ると、山菜と赤飯で私の到着を祝ってくれた。父の従兄というのは、すでに八十九歳で、顔もどこか父に似ている。集った二十数人の「親戚」の人に挨

拶され、紹介されたが、どの人がどういう筋合になっているのか一どきには理解できなかった。親切な人たちは私に親近感をもってくれ、父の生家や、父方の祖父母の墓に案内してくれた。柿の実のなった梢の下の径を歩いた。

父の生れた農家は、今は全く縁故のない人が住んでいるが、玄関は牛小屋の代りになっている。父は郷里を出てから、一度もこの家を見ていないのである。

村の中を日野川が流れているが、父の想い出話の中には必ずこの川の名が出てくる。父の従兄は耳が遠く、全く話ができなかったが、以前に大病を患ったとき、家族がその録音をとったといつてそのテープを聞かせてくれた。その中に、幼いときその人が父と遊んだ話など出ている。

父は生れるとすぐ事情があつて、他家へ養子にやられた。父の実母は妊娠したまま一時、離縁になったのである。父が養子にやられたのは、そのためだろうが、そのへんのくわしい事情は分らない。何か暗い気持がする。

「峯太郎は、小学校のころにはよく遊びに来よつたが、それから、いつの間にか来んようになった」

とテープの声は語っていた。そのころから父は故郷と絶縁したとみえる。

私は親戚の者から記念に何か書けといわれて、次の文句をしたためた。

「父は他国に出て、一生故郷に帰ることはなかった。私は父の眼になってこの村を見て帰りたい」

私は村の写真を書した。親戚は本家分家と入りまじって
いて、誰が誰やら私には判別がつかないが、みんな村では
相当な暮しをしている。父ひとりが生れながらに不幸であ
った。――

父は峯太郎といった。生れるとすぐに米子の松本米吉、
カネ夫婦のところに養子にやられた。当時、この夫婦はど
ういう職業に携っていたか分らないが、あとで考え合わせ
ると、餅屋をやったこともあるようである。財産も土地も
持たない貧乏所帯であった。田中家と松本家との関係は今
となつては分らない。松本夫婦に子供がなかったことだけ
はたしかだ。

米子と日野郡矢戸村とは四十キロばかり離れている。現
在のように伯備線は通じていなかったから、両家がどうい
う因縁で交際をしていたかは分らない。

峯太郎の母親は、同郡霞というところにある福田家から
来ていた。ここで長男峯太郎を産んだのだが、いかなる理
由からか、母親は田中家から一時離縁されている。そして
峯太郎を松本家に養子に出したあと復縁し、つづいて二人
の男子を産んでいる。この分らない理由に想像をつければ
いろいろと考えられるところだ。

米子に貰われて行った峯太郎が、子供のころ、矢戸の実
家にたびたび帰っていたことは、前記の峯太郎の従兄に当
る田中老人の言葉の通りである。「小学校のころにはよく

遊びに来よったが、それから、いつの間にか来んようにな
った」のである。なぜ、来なくなったか。それは田中家の
ほうで峯太郎を忌避したのか、あるいは子供心にも峯太郎
が暗い出生の事情を察して足を踏み入れなくなったのか、
その辺のところも分らない。

田中家は次男を失い、三男が育った。この三男は嘉三郎
といい、のち故郷を出て教員になった。

だが、父にはこの二人の弟と遊んだ記憶があるらしい。
だから、それは小学校のころに遊びに来ていた時代と思わ
れるが、二人の弟といっしょに峯太郎が寝ているのを、横
に寝ている母親がうれしそうに見ていたと私に話していた。

峯太郎と嘉三郎とはのちに広島で再会したが、このとき
は、嘉三郎は広島の高師範学校を卒業し、たまたま広島
に居る峯太郎を訪ねたのだった。つづいて大分の中学校に
赴任し、そこで妻を娶ったらしいが、それ以後は峯太郎と
は全く会っていない。嘉三郎はのち教員生活をやめて東京
に住み、今の学習研究社や旺文社のような、受験雑誌の出
版会社に入った。そこで辞書その他の編集の才能を買われ、
重役になって死んだが、その遺族は現在杉並にいます。

私の小説に「父系の指」というのがある。私小説らしい
といえ、これが一ばんそれに近いが、私の父と田中家と
の関係をはほとんど事実のままにこれに書いておいた。

峯太郎は、小学校を卒業するとすぐ役場の給仕に雇われ
ていたらしい。そのころから、当時の習慣で漢文など勉強

していたようだが、その給仕も間もなく辞めて郷里を出奔した。この辺からの話は、私が幼いときから父の手枕で寝物語に聞いたものに多い。もつとも、どういう事情から彼が松本家を家出したか、それは義理の両親との間に了解があつてのことかどうかは私は聞いていない。

一体、矢戸村というのは、前の引用にも書いた通り、中国山脈の脊梁の北の麓である。いま、岡山方面から伯備線に乗って米子に向うと、備中神代という駅がある。その駅を過ぎると、すぐにトンネルに入るが、その上が鳥取県と岡山県の県境に当り、同時に分水嶺でもある。トンネルを抜けると、伯耆の国になり、生山駅につく。

傍らは「豪溪」という名の付いた「日野川」上流の溪谷となつてゐる。雪舟が近くの寺に住んでいたという伝説がある。

家出した峯太郎は、その日野川に沿って米子から歩き、いま日野町となつてゐる根雨から作州津山に出た。十七、八のころらしい。この路は出雲街道といわれ、同じく県境に四十曲の峠がある。

この四十曲から勝山、津山の路はぜひ私も歩いてみたいと思つてゐるが、先年、講演旅行のときに泊つた皆生温泉の宿に、横山大観の絵の消息文が額に収められてあつた。

その絵を見ると、大観が人力車に乗り、突兀とした山路を走つてゐる図になつてゐる。明治四十二、三年のことらしい。

さて、峯太郎の出奔は、生涯ふたたび郷里に足を入れることのない、最後になつた。津山から大阪に歩いて行つたが、そこで何をしてゐたか私には分らない。次の父の話は、彼は突然明治二十七年の日清戦争のときに広島県の警察部長の家で書生となつてゐる。

その辺を想像すると、どうやら、峯太郎は法律を勉強して弁護士（弁護士）の書生になり、ゆくゆくは弁護士の資格試験でも受けるつもりだったらしい。このことは、私がかなり大きくなつてまでも父が法律のことをよく口にしてゐたのである。

或るとき、何のごたごたか知れないが、人が来て玄閑先で父と争つてゐた。そのとき、父は何か法律上の条文を持ち出したらしい。今でも、その九州の家のうす暗い玄関で、父が端然と坐つて応対してゐる姿を思いだす。相手は、なに、法律だつて？ 法律を持ち出されてはお仕舞いですな、そんなら、わたしのほうもそのつもりで出直しましょう、と啖呵を切つて壊れかかった格子戸を手荒く閉めて行つたことを憶えてゐる。

しかし、その法律勉強も警察部長の転任で挫折し、あとは広島衛戍病院の看護雑役夫の生活になつてゐる。

「寝台に横たわつた病人や怪我人が、夜中に水をくれ水をくれと言つて、ちよつとも寝かきなんだのには往生した」と父は言つてゐた。

それから先はどういう生活になつてゐたかよく分らない。

しかし、相変らず底辺で蠢いていたことはたしかなようだ。そのころであろう。峯太郎は、広島県賀茂郡志和村出身の岡田タニと結婚している。

私は父の故郷を二度訪れているが、まだ母の故郷には行ったことがない。この志和村というのは、山陽線を通ると昔の機関車なら瀬野と八本松の間で二台連結するほどに急な勾配となっている。志和は、その瀬野駅で降りてもいいし、八本松駅で降りてもいい。山陽線のこの辺を通るたびに、私は窓に寄って母の故郷を望見する思いになる。

岡田タニの実家は農家で、姉弟五人であった。タニは長姉で、村を出てから広島で紡績女工をしていたらしい。目に一丁字がなかった。

「こまい（小さい）とき学校の先生に怒られてのう、それでとうとう学校には行かずじやった。あとで先生がえろう迎えに来んさったが、あのとき学校に行っちゃれば、少しは字が読めたにのう。うちら新聞が読めんけんなんにも楽しみがない」

とよく言っていた。

広島から峯太郎とタニとが九州小倉に移った事情はよく分らない。当時の九州は戦争後の余波で、まだ炭鉱の景気がよかったのではないかと思う。しかし、小倉には炭鉱がなく、もともと父は労働が嫌いなほうだった。それで、炭鉱景気で繁昌している北九州の噂を聞いて、ふらふらと関門海峡を渡ったのではないかと想像する。明治四十二年十

二月二十一日に私が生れている。

相変らず両親の貧乏生活はつづく。もつとも、子供は私一人でなく、私が生れる前に姉が二人いた。これは嬰兒のときに死亡し、結局、私だけが育ったというわけだ。

「これを見い。おまえが赤ん坊のときに、これを着せて育てたんだな」

母は古い葛籠をあけてボロ布片で綴り合せた嬰兒の襦袢を出してみせることが多かった。それは子供が育たないので、この子だけはこのことから市内を巡礼してほうぼうの家の寄進で集めたボロ布片を襦袢に縫い合せたのだという。

次の私の記憶は、小倉から下関に移る。

今は下関から長府に至る間は電車が通じているが、当時は海岸沿いに細い街道があるだけだった。現在、火ノ山という山にケールカーがついて展望台が出来ているが、その場所が旧壇ノ浦といつて平家滅亡の旧蹟地になっている。そこに一群の家が六、七軒街道に並んで建っていた。裏はすぐ海になっているので、家の裏の半分は石垣からはみ出て海に打った杭の上に載っていた。私の家は下関から長府に向って街道から二軒目の二階家だった。

どういいうわけか分らないが、このころ、米子に居たはずの松本米吉とカネとが呼ばれて、この家に同居している。そこで街道の通行人を相手に商いをしたのが餅屋であった。父はそのころどのような職業に携っていたかよく分らな

い。もともと労働が嫌い、後年、私の記憶のはっきりするころには米相場や無尽会社みたいなことをやっていたから、楽をして儲けようという気持があったらしい。

私にとって義理の祖父に当る米吉には記憶がない。遠い、おぼろな思い出の中には、二階の一間に蒲団が敷かれ、影のような人間が並んでいたことを憶えているが、それが祖父の臨終だったのかもしれない。

「おまえはじいさんとは言えないで、イーヤンと呼んでいた。死ぬ前のじいさんはおまえを見て、いくらイーヤン、イーヤンと言うても、もう返事ができんわい、と言うていた」

と母から聞かされたことがある。

家の裏に出ると、渦潮の巻く瀬戸を船が上下した。対岸の目と鼻の先には和布刈神社があった。山を背に鬱蒼とした森に囲まれ、中から神社の豊などが夕陽に光ったりした夜になると、門司の灯が小さな珠をつないだように燦く。

母の妹がいて、その亭主が鯨のボテ振りをしながらこの辺まで来て、よく店先で休んだ。手首に桃の刺青があった。酒をよく飲む男であった。

ついでに言うと、母のたった一人の弟は九州で炭坑夫となり、すぐ下の妹がこの魚の行商の女房であり、その下が山口県三田尻というところで陸軍特務曹長の女房だった。その次の妹はそのころ行方不明になっている。

半生 記
両親がまだ広島に住んでいたころ、この妹というのが、

一日、私を乳母車に乗せて街に出たが、私を放ってふいと姿が見えなくなったそうである。後年、この妹がいい年齢になって姉たちと再会したが、そのときの心理を訊かれて、「姉さんがあんまり口やかましいから」

と言ったそうである。実際、母親は口やかましい人だった。それに絶えず心配性だったのは、父があまりに呑気にして家の手伝いには見向きもしなかったからであろう。私の幼い時の両親の記憶は、ほとんど夫婦喧嘩で占められている。

白い絵本

父の峯太郎は八十九で死んだ。母のタニは七十六で死んだ。私は一人息子として生れ、この両親に自分の生涯の大半を束縛された。

もし、私に兄弟があったら私はもっと自由にできたであろう。家が貧乏でなかったら、自分の好きな道を歩けたらう。そうすると、この「自叙伝」めいたものはもっと面白くなったに違いない。しかし、少年時代には親の溺愛から、十六歳頃からは家計の補助に、三十歳近くからは家庭と両親の世話で身動きできなかった。——私に面白い青春があるわけはなかった。濁った暗い半生であった。

両親は絶えず夫婦喧嘩をした。それは死ぬまで変りはなかった。別れることもできず、最後まで暮らして、母が

先に死ぬまで互いに憎しみを持ちつづけていた。母が息を引きとるとき、狭い家の中にいるのに父はその傍にも寄りつかなかった。母は、父といっしょになつたのは業だといつていた。私もそう思っている。こんな不幸な夫婦はなかつた。

父は、母を常識のない女だと罵つていた。それはその通りである。母は一字も読めなかつた。父は、それにくらべると新聞をよく読んでいて世間一般の常識は心得ていた。

父は政治記事に多く興味をもつていた。広島県の警察部長の書生のようなことをしていたころ、法律のことをかじつていた名残りかもしれない。そして当然なことに、その政治関心は基本的なものではなく、政治家の動静のようなものに一種の憧憬をもつて注がれていた。また、ふしぎに歴史に詳しかった。これも講談本から仕入れた知識とはいえ、いま聞いても決しておかしくはない。

冬の夜、足を炬燵に突込んで父の手枕で聞く太閤記などがどれくらい面白かつたか分らない。今おぼえているのは賤ヶ岳の合戦のくだりだ。

「大徳寺で焼香争いが起つたとき、秀吉が三法師君を抱いてしずしずと現われた。この人こそ信長の孫でほんまの相續人ちゆうての、柴田勝家を尻目にかけて仏壇の前にすすんだのじゃ。勝家がおこつてつかみかろうとすると、寺の襖がバツと開いた。勝家が見ると、寺をとりまいた山という山、野という野には秀吉の軍勢がいっぱいになって、

旗をなびかせ、ホラ貝を吹いていた。さすがの勝家もこのありさまを見て腰をぬかし……」

と聞くと、幼い私の眼には、大徳寺をとり巻く山のかたが、毎日見なれている火ノ山になり、そこにひしめいてゐる甲冑に陽がキラキラと光つて映るのだった。

「……佐久間玄蕃は賤ヶ岳の中川清兵衛と高山右近の柴を二つ破つたから大威張り、慢心してそこに腰をすえた。うしろから柴田勝家が早う戻れちゆうても、言うことをきかんのじゃ。岐阜ちゆうところを攻めちよる秀吉は、まだ、二、三日はかかると思うちよつたのじゃのう。一方、秀吉のほうに柴田を賤ヶ岳に誘いよせたのは計略じやつたから、家来から勝家がまだそこにいるちゆうことを聞いて喜んでのう、すぐに家来に言いつけて、岐阜から大垣、賤ヶ岳の近くまでの道には、え（家）というえには馬のカイバと水を出させ、握り飯をたかせ、かがり火を燃やさせた。秀吉はまっさきに馬に乗ってかけ出した。夜になつても、かがり火のために道は明るいし、腹が減れば握り飯は食べられるし、馬には水やカイバをやるから秀吉の軍勢は少しもへこたれん。急げ、急げとばかりその夜のうちに賤ヶ岳のふもとについた。……この火を見た佐久間玄蕃は、はじめは秀吉の軍勢ちゆうことはほんまにせんじやつたが、そのうち秀吉の軍勢が仰山になると、そのタイマツの火でまるで山の下の方がクワジみたいになつた」

私の眼には風の鳴る暗い山々に点々とした篝火が実際に

見えるようであつた。そして一度だけ遠くから見た山火事の記憶をそれに結びつけて空想したものだった。

父の言葉は、^{伯耆訛}と^{広島訛}がごっちゃになっていた。家をエト言い火を^{マモナイ}と発音した。古代に近い発音だそうである。

母との夫婦喧嘩がなければ、これはまことに愉しい記憶であつた。こんな講談を半分くらい理解できるようになったのは、小学校三年生ぐらいのときだが、そのときは下関から長府に至る街道からは移っていた。

そのころの父は肥えはじめていた。ある日のこと、ナグレ者（浮浪者）が来て店の餅をタダ喰いして逃げた。父が追って殴っていたのを見たことがあるが、父を強いと思うと同時に若い男に同情した。夕暮だったので余計にそう思ったのかもしれない。二十二、三のころ、腹を減らして金もなく道を歩いていると、このとき的情景がよく浮んだものだ。

そのとき住んでいた旧壇ノ浦の家は、六、七軒あつたが、うどん屋が一軒、人力車の溜り場が一軒のほかは、船大工、漁師といった商売だった。そこから長府までは約六キロの道程で、近くの祭礼といえ、赤間宮の先帝祭と、長府の乃木神社の祭りであつた。

先帝祭の記憶はあまりない。花魁の道中がおぼろに印象に残っている程度だが、乃木神社の祭りはかなり強い記憶になっている。乃木大将の勲章を着けた軍服が子供心に珍

しかった。

一度、近所の人力車に乗せられて乃木神社に父といっしょに行つたことがある。煎餅が何か買つてもらつたが、それが私の幼時の最大の贅沢であつた。

餅の話になるが、そのころは祖母が餅の造り方を両親に教えていたようである。今でも憶えているのは、普通の糯米で造つたのと、色の黒い餅とがあつた。これは唐芋の粉で出来たのだが、ひどくまずいものだった。

「これをマムナイ（うまくない）と言う人もあるけど、人の好き好きじゃけん」と

と、祖母が店先に腰かけている客に言つた言葉が残っている。

暗い奥の部屋から表の店を見ると、光線の加減で腰かけている客の姿がみんな黒い影になっていた。客といえ、ほとんど長府から下関に歩いて商売に行く人ばかりで、この辺がちょうど休み場になっていた。すぐ裏はカケダシ（海に突き出た台の意）なので、暴風の晩などは船が支柱に当つてそのカケダシを壊すことがある。そこはほとんど炊事場になつていたので、物凄い音を立てて雑多なものが海に落ちた。

母が「アレノウ、アレノウ」と叫んでいる声が風に混つて聞えたものである。潮流が激しいため漁船の難破も多かった。

ときたま下関の安物の芝居につれて行かれたが、旧壇ノ

浦にかかると、一キロばかり何も無いところになっている。その端に白い燈台があったが、そこが一つの道程の切れ目みたいになっていた。

ある冬の晩、寝ていると、急に母に揺り起された。家中は大騒動している。母は私を背負い、二階から海側の屋根に出て隣の屋根伝いに逃げた。すぐ前の火ノ山が山崩れして家の表まで破壊したからだ。しかし、そのとき物音は一つもなかった。山崩れはあまり音を立たないものだとして初めて知ったのはそのときである。

一時、別な場所に移ったのだが、それがどういう家であったか、よく憶えていない。いま壇ノ浦付近を通ってみても、もちろん、私の居た家や近所は一切無くなり、記憶の拠りどころも消えている。新しく移った近所には若い女が居て「カチューシャ」の唄をよく歌っていた。その少女の歌う咽喉を見上げると真白であった。

もう一つ年代の手がかりになるのは、まだ山崩れの起らない前、明日は偉い陸軍大将がここをお通りになるので出迎えに行こう、と父が言った。朝早く起されて、家から五百メートルばかりの海際の崖縁に立っていると、下関から来たらしい在郷軍人のような連中が旗を立てて待っていた。

私は、陸軍大将というので、さぞかし乃木大将のような勲章を着けた人が来るのかと思っていると、馬に乗った年寄が十人ばかりの供を連れて長府のほうから現われただけだった。その大将は私たちの前を通り、整列した在郷軍人の

前で馬を止め、何やらぼそぼそと話していた。私が何か言おうとすると、父は「静かに、静かに」とたしなめた。

「静かに」といわれて、私は自分がおとなびたように感じられた。老軍人の訓示はすいぶん長いように思われたが、それが済むとまた馬の一行がぼつぼつと下関のほうに去った。これが福島安正大将であった。後年、福島中佐のシベリア単騎旅行を読むと、いつも、このぼそぼそとした老人と、父の「静かに」という声とが蘇ってくる。

こういう思い出はまだまだ仕合せな部分である。

父と母との争いは絶えなかった。そのころ父の生活が少しよくなっていた。法律の知識が少しあるので裁判所によく出入りをした。示談屋みたいなことをやっていたのではなからうか。とにかく、朝早く母の手伝いで餅を搗くと、ぞろりとした絹物に着更え、柎目の下駄をはき、裁判所にかけた。無尽のようなこともはじめていた。

父は体格がいいのに肉体労働を嫌い、そういう仕事ばかりやっていた。まだ米穀取引所があったところで、空米相場もしていた。そのせいか、天気を見ることは巧かった。夕方、家の外に立って雲の色を眺め、明日は雨だとか、日和だとか言っていたが、それが奇妙によく当たった。米相場は天候に大きく支配される。

そのころ私は眼をわずらい、失明寸前になった。このとき母が一生懸命になって、医者にはかけずに専ら弘法大師に頼った。なんでも、坂道を上って石段の高いところにあ

るお堂の中につれ込まれたように憶えている。線香の匂いと、蠟燭の灯とが記憶に鮮かだから、あるいは眼が実際に見えなかったのかもしれない。坊さんが経典を扇のように翳す、その風の音も耳に聞いている。

そんなときだったが、父には女が出来ていて、始終、そこに通っていた。それは遊廓の女だったらしく、母は私を背負って遊廓を尋ね歩いた。町の中にガラスの工場があり、職人が長い鉄棒の先にはおずきのような赤いガラス玉を吹いていた風景は忘れられない。そこが家から遊廓に行く途中のちょうどまん中なので、母は重い私を下ろし、ひと息つくのが常だった。母は私を背負って宵の遊廓を一軒ずつのぞいて歩いたそうである。

父は母に怒ると、その朝出来上った餅を全部ゴミ溜に棄てたりした。

祖母は母を手伝って餅を造っていた。

「のう、おタニさん、今日は彼岸の中日じゃけに喧嘩をせんようにしんさいや」

とよく言った。

「え(家)の中が揉めるとええことはないけにのう。えの内は仲ようせんと栄えることはないけに」

額の広い、おとなしい老婆だった。

父の道楽で家の中が苦しくなった。祖母は他家の女中となつて出て行った。六十くらいだった。私も、祖母の奉公先に遊びに行ったことがある。静かで大きな家だった。そ

の家には中年のきれいな女がひとりいた。妾宅だったかもしれない。

相場で失敗した父は、その祖母のもとに金を借りに行くようになった。

「おとつあんは、えに戻ってくるかや？」

と祖母は私に訊いた。小学校二年生ぐらいのときだった。父は長い間、家に寄りつきもしなかった。私は父が女のもとにずっといるとばかり思っていた。

ある日、校門を出ると、父が電信柱のかげにぼんやりと立っている。きたない身なりをしていた。遊びにこい、というから、久しぶりに会った父に何となく恥ずかしい思いでついて行くと、そこが木賃宿であつた。

臭う町

近ごろ都会の果物屋に棗の実があまり見られなくなった。栽培技術の進歩によって贅沢な味になった高級果物のなかでは、棗などは見向きもされなくなったのであろう。だが、私は、あの鶏の卵のような斑のある、いくらか蒼味のかかった果物が好きである。ばさばさした舌ざわりの中からしみ出る甘酸っぱい液汁が好ましい。

私は小学校の裏門から父に呼ばれて、その木賃宿に行く途中、通りがかりの八百屋で、棗の実を買ってもらった。木賃宿では、殺風景な広い座敷に、宿泊人がごろごろして

いた。夫婦づれの者もいた。父の場所は、その奥まった二畳ぐらいのひろさで、そこであぐらをかいて新聞紙をひろげ、買ってきた粟の実を私に食わせた。思いのほか量が多かったので、私は腹いっぱい食べた。

「どうじゃ、おかあはどうしているかい？」

父は私に訊いた。父はその頃からよく肥えていて、全盛の頃には絹物づくめで恰幅があつたが、それが今ではしおたれた着物で、大きな身体だけにあわれであつた。だが父は、にこにこして同宿者に私のことを話していた。

小倉に移るまで、父はそんな生活を送っていた。空米相場で失敗し、仲買店からも締め出された父は、同じそういう落伍者ばかりで、その日の相場の数字を賭に取引所のまえて乞食博突のようなことをやっていたのだつた。

父に家を出られたあと、母と私とは隣の蒲鉾屋に一時厄介になった。そこでは母は女中代りのようなことをして働いていたが、私はその家の息子たちから白い眼をむけられた。その一家は自分たちで食い散らした魚の骨をもう一度ゴツタに煮て吸物にし、母と私に飲ませた。母はかげで涙を流した。

父がようやく家に戻り、小倉に移ることに話が決つた。小倉の古船場という町に風呂屋があつて、その風呂焚きをしている奥田という知合いの老人を頼つたのである。この夫婦はひどく善人で、亀井という雇主からも信用されていた。住居は風呂の裏手にある六畳二間ぐらいの家で、多分、

風呂屋の主人にタダで住まわせてもらったのだろうが、その一間を私たち親子三人が間借りすることになった。

私は小学校を変り、天神島小学校の五年生だった。

父はいろいろな仕事を探していたが、すでに四十を越しているような身には思うような職業もなかった。近くに兵庫屋という百貨店まがいの店があつて、その下足番に雇われたりなどしていた。百貨店といっても、その頃は客が下駄を脱いで畳のある売場に入ったものだつた。

その風呂屋のある市場に近い且過橋という橋を渡ると、角に古本屋があつた。私は狭い間借りでは息が詰りそうなので、この古本屋によく行って立ち読みしたものだつた。その店の前には小さな電車が香春口というところまで走っていた。

香春口からは鉄道馬車が北方という町まで往復していた。その香春口の電車の終点近くに木造の古い教会があつた。のちになつての知識だが、鵜外がフランス語を習に行つていたのがこの教会だった。鵜外の『小倉日記』には、そのの神父だったフランス人ベルトランとの交遊が書かれている。

その年の暮から、父は橋の上に立つて塩鯉の立ち売りをしはじめた。それは市場から帰る客を目当てにしたものだが、市場のものよりはいくらか安かつたとみえ、予想外の商売になつたらしい。

このことから、ようやく奥田家の間借りから解放され、